Ｂ－５

明治から大正時代に多発した小児脳膜炎の原因解明までの経過を探る
ー自閉症の原因解明に向けてー

中央区・はなクリニック　徐　昌教（医師）

明治から大正時代にかけて「いわゆる脳膜炎」という原因不明の病気が多発した。この病気について知っている医師は少ない。男女とも年間３万から３万五千人、合計７万人が死亡したとされている。

１８９５年「百日咳に所謂脳膜炎を合併せる１例」が伊東により最初に報告され、世に広く知られるようになる。平井毓太郎（いくたろう）医師によってこの病気が、鉛中毒と判明したのは１９２３年である。最初の報告からおよそ３０年の長きにわたって奇病であり続けた。平井医師の解明までの道筋をたどり、彼が得た教訓を明らかにしたい。

さらに、「自閉症」と「所謂脳膜炎」との共通点と差異を比較検討することで、いわば現代も奇病扱いされている、自閉症の原因解明に向けて歩みを進めてみたい。